

NO.320
1995

5

文化庁月報

CONTENTS

特集／古代人のロマンを求めて—考古学はいま—

巻頭言 みんなの文化財を目指して	佐原 真	4
発掘現場から—調査成果とこれからの活用		
三内丸山遺跡（青森県）	岡田康博	13
柳之御所遺跡（岩手県）	小田野哲憲	16
原の辻遺跡（長崎県）	副島和明	19
「新発見考古速報展'95」Q&A		7

連載

●随想／神戸の西洋館はどうだった	藤森照信	22
●地域からの文化発信／博物館・美術館紹介②	郡山市立美術館	24
●後世に残そう我が県の文化財②／佐賀県	基肄城跡、名護屋城跡並陣跡	27
●人間国宝を訪ねて②／常磐津節三味線	四世 常磐津文字兵衛	30
●著作権法講座Q&A／2		32

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

・平成6年度 芸術選奨決まる	33
・平成6年度 芸術作品賞決まる	36
・平成6年度 文化庁優秀映画作品賞決まる	37
・平成6年度 舞台芸術創作奨励賞決まる	38
・平成7年度 中学校芸術鑑賞教室公演日程決まる	39
・平成7年度 移動芸術祭・同巡回公演春季公演日程決まる	41
・名称決定 新国立劇場	40
・第3回国立国語研究所国際シンポジウムの概要	42

イベント案内

・東京国立博物館「甦る在外名画展」／43	・芸術文化振興基金ニュース／46
・京都国立近代美術館「ギョスタヴ・モロー展」／44	・6月の国立劇場／47
・東京国立近代美術館工芸館「コンテンポラリー・ジュエリー展」／45	・表紙解説／編集後記／48

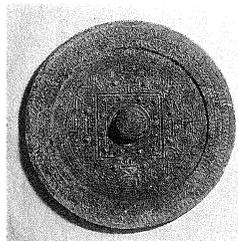
新発見考古速報展'95



三内丸山遺跡（青森県）の発掘風景

現在、日本全国で約九千件の遺跡が発掘されている。古代史上の大きな発見のあった佐賀県吉野ヶ里遺跡や青森県三内丸山遺跡などの大々的な報道の影響もあって、発掘風景は一般人にとってもけっこう馴染みのあるものとなったのではないだろうか。こうした背景から文化庁では今年度「新発見考古速報展」をスタートする。そこで、その事業内容と考古学の最新情報などについて担当調査官に話を聞いた。

Q&A



卑弥呼の鏡？（京都府大田南5号墳）

「新発見考古速報展」の概要

――事業のねらいについて。

遺跡とは、つまり「昔の人々が暮らしていた跡」であって、それほど珍しいものではありません。現在、各市町村で遺跡台帳を作成していますが、その台帳に載っている遺跡の数は全国で約三七万箇所。発掘調査をしているのは年間約九千箇所です。その中でも縄文人のイメージをがらりと変えた三内丸山遺跡（青森県）や卑弥呼の鏡か？と話題になった大田南5号墳（京都府）などは全国紙の一面の扱いで、テレビでも大々的に取り上げられました。そういう影響もあって発掘調査の成果というものに、皆さんたいへん興味を持っていらっしやうと思います。

調査が終了すると、大勢の人に見てもらうため遺跡説明会を現地で開催しますが、三内丸山の場合には毎日何千人という人が訪れました。ただ実際には、出土品を目にする事ができる人はほとんど地元の人に限られています。せっかく注目されているのに、ごく限られた人しか見ら

れないのでは、あまりにももったいないではないかという発想から、注目された遺物を中心に展示を構成して全国を巡回し、たくさんの人に見ていただくというものです。

――三七万箇所の遺跡があるということですが、なぜ発掘してみる前から「ここには遺跡がある」とわかるのですか。

古墳のように地形に現れているものや、貝塚で地表に遺物が出土しているものはすぐわかります。また、畑などを歩いて土器や石器といった遺物の広がりを見て、遺跡がある場所を確認するわけです。

日本列島は山地も含めて三七平方キロメートルですから、実に一キロ四方の中に一つは遺跡があるという計算になります。それが平野部に集中しているわけですから、ほとんど遺跡だらけといってもいいですね。

発掘現場では

――発掘の手順を教えてくださいませんか。また、三七万箇所のうち、どういつきつかけで調査が行われるのですか。



(右)葬儀の様子をあらわす埴輪
(群馬県世良田諏訪下遺跡)



(右)上高森「原人」がのこした約
50万年前の石器(宮城県上高
森遺跡)

発掘調査の動機は、遺跡の内容を
解明しようとするもの、将来の史跡
指定に向けて範囲を定めようとする
もの、遺跡を史跡公園として整備す
るための資料を得ようとするとな
ど様々ですが、今日最も多いのは開
発によって壊される遺跡をあらかじ
め調査し、記録を残しておくとい
うものです。

遺跡の広がりについては歩いてみ
ればある程度の見当はつけられます
が、正確にはわからないので、まず
細長い溝や四角い小発掘区を設定し
て試し掘りをします。それによって
その遺跡の深さがどのくらいか、時
代はいつのものか、どういう性格の
ものなのかということが推定できま
す。それから開発に伴ってどの部分
が壊されることになるのか、調査し
なければならぬ範囲を確定して本
調査にはいります。地層は下から

順々に積もっていますから、新しい
ものから一枚一枚でいねいに削いで
いくように掘り進めていくわけです。
何千年も残っている遺跡を将来に
伝えていくことはとても重要なこと
です。したがって、開発計画が明か

になってきた段階で、できるだけ遺
跡を残すようにいろいろ調整をしま
すが、どうしても壊れてしまう場合
は、発掘を行い、遺跡の代わりにデ
ータを後世に残していく方法をとら
ざるを得なくなり得ます。そういつた
ケースは九千件の調査のうち実に九
七%に及んでいます。調査が済むと、
写真や図面などの記録と遺物を、壊
れる遺跡の代わりに保存します。た
だ遺跡は平均して一ヘクタール以上
の広さをもっていますので、一部
が開発計画地と重なる場合がほとん
どで、遺跡全体が壊れてしまった例
は約七%です。

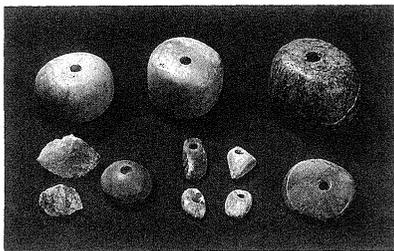
——そもそもいつい根拠で何年へ
らい前の遺跡だと推定するので
すか。
基本的には出土した土器などの遺
物が語ってくれる情報をつぶさに調
査していくことです。

これまでの調査の積み重ねの結果、
こういう文様、形の土器はいつ頃の
ものかという編年表が全国レベルで
出来上がっていますから、それに当
てはめればよいのです。
今、日本でいちばん古い遺跡は五

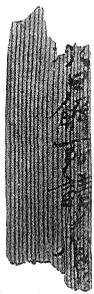
〇万年前のものといわれていますが、
正確には五二一万年なのか四九万年
なのか、簡単に一万年といっても実際
の年月にすればたいへんな時間なわ
けです。そういう絶対年代を確認し
たいときに使われるのが、炭素14測
定法やフィッシュントラック法、熱ル
ミネッセンス法などの理化学的な方
法です。

炭化した木には含有量がずっと不
変の炭素16と徐々に減っていく炭素
14とが含まれています。その二種の
炭素の差を測定し判定するのが炭素
14測定法です。「一定量減っていく」
という法則を利用したわけです。反
対に石英に蓄積される放射線のように
「一定量増えていく」法則を利用
した熱ルミネッセンス法もあります。

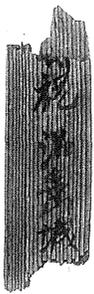
最近では、発掘した柱などの木の
年輪の様子をよく観察し、年輪の幅
の変化のカーブの編年表に当てはめ
て、いつ伐り出されたものか判定す
る年輪年代測定法も使われています。
それから木簡などに文字が記され
たものが出土する場合があります。
例えば「養老何年」と書かれていれ
ば、一緒に出土した遺物の年代も推



三内丸山遺跡から出土した糸魚川産のヒスイ



(裏)



(表)

幻の城「沼垂城」の存在
を立証した木簡(新潟県
八幡林遺跡)

定できます。

——逆に考えれば、遺物が文献の裏
付けになる場合もあると。

今回の展示品の中でその象徴的な
例があります。

新潟県の八幡林遺跡(和島村)か
ら出土した「沼垂城」と書かれた木
簡がそれです。日本書紀の大化三年
(六四七)に日本でいちばん古い城柵
淳足柵をつつたという記事がでて
くるのですが、一部では実在が疑わ
れていました。ところが発掘調査の
結果、実際に文字に書かれて出てき
た。しかも「養老(西暦七二〇頃)」
という文字も一緒に記されています。

それから、七、八〇年ぐらいの間、実際
に存続した城だとわかったわけでは
ありません。これも実際に掘ってみな
ければわかりなかつたこと、文献で
はつきりしなかつたことが、発掘
によって証明されたわけです。出て
きたときほど感動したか言葉では
言いません。八幡林遺跡から五〇
キロほど離れたところに「ぬつた
り」という地名の町があるので、
そこではお祭りのような騒ぎ
でした。

この遺跡も国道のバイパス建設に
伴って調査が行われたのですが、重
要性が認められて保存措置がとられ
、国の史跡になりました。

古代人の生活が見えてきた

——他に発掘に携わって、「おもしろ
いな」というエピソードは。

やはり古代人たちの交流の跡、物
の流れを目的にしたりするとおもしろ
いですね。例えば、宮城県の鳴瀬
町里浜貝塚で出土した土器と同時代
で同じ作り方のものを探していくと、
少し北の石巻市の沼津貝塚と同じだ
とわかります。鉾とか釣り針の作り
方も同じで、二つの貝塚の関係がも
のすごく強いらしい。実際に今でも
地元の人に聞いてみると、お嫁に行
ったり来たりということがよくある
という。そうするとこの二つの土地
では、古代からずっと婚姻圏にある
のではないかと推定できます。

そういう交流は狩りに使う鉄の材
料の石を山間の村から調達してくる
というような物資の交流が文化的な
ネットワークになっていっているわ
けです。

現代のように電話やテレビなどの
便利な通信手段がないからといって、
情報の伝達に時間がかかっていただ
ろうと考えるのは現代人の思い込み
です。非常に活発に交流していた形
跡は全国のいたるところから発見さ
れています。

——交流のわかりやすい例は。

今回の速報展のリストの中に、北
海道の入江貝塚で出土した二キロ
も離れた南の島でとれた貝製品がは
いっています。あと、よく知られて
いるものでは、新潟県の糸魚川周
辺でしか採れない翡翠が青森県や北
九州からも出土している例ですね。

物の動きは日本の中だけにとどま
らずに、大陸からのものもあります。
今回展示する常呂川河口遺跡からは
ロシア産の琥珀が出土しました。伊
豆七島にも縄文時代の遺跡がありま
す。古代から丸木船で遠洋漁業にち
かいたようなこともやっていたらしい
証拠はいくつかあります。現代人の
ように定住生活をしていると想像も
つかないけれど、定住が進めばその
あいだを結び付ける役目の人が出て
きたりして、非常に発達した伝達シ



脳みそを取り出された5世紀の馬の頭(埼玉県諏訪木遺跡)



高さ45cm、日本最大の土偶(山形県西ノ前遺跡)

STEMがあったと思われる。

中核展の見どころ

——実際に展示をみるときに「弥生〇〇式土器」などと書いてあるところについても拒否反応が出てしまつたのですが、今回は何か展示の工夫は。

今回はそういう表記をしないようにしようと考えています。それから土器や石器だけでなく、土偶、装飾品、「縄文ポシエット(編み物)」、鏡、火熨斗(古代のアイロン)やわ

らじなどの日用品、馬や猪の頭蓋骨、犬の焼き物など従来はあまり展示されなかったものもありますので、ご覧になった人が一つの出土品からどんな想像を広げていってほしい。例えば馬の頭だけ発見されているということからは、祭祀用の犠牲獣として使われたとか、脳天に穴が空けられているのは脳髓を皮なめしに使ったかいろいろと想像できます。馬はいったいいつ頃から飼われているのか、その出土品によって歴史上どんな発見があったのかということがよくわかるように展示していきたいと思えます。

——先ほどの「婚姻圏」の話などをうまく展示できるとおもしろそうですね。

そう思いますが、やはり予備知識がないと見ただけでは理解できない部分が多いと思いますので、今回の展示では、日本でいちばん大きい土偶といちばん小さい土偶を並べてみるとか目で見て楽しめるもの、という配慮をしました。「最古のわらじ」は、昔の人が粘土に足をとられて、そこにわらじを残してきてしまった

ものなんです。泥濘にはまるといのは誰でも経験があるようなことで、昔の人が「おっと」と言って言っておわっている様子が想像できておもしろいでしょう。ギャラリートーク(解説)も考えていますので、ぜひゆっくり見てほしいですね。

——考古学Ⅱ土器や石器の研究、というイメージがかなり変わって来ました。いろいろな物が研究の対象になっているわけですね。土器の研究、つまり、年代判定の研究がいちおう一段落したので、今度はその遺跡で人間のような行為が行われていたのかということに思いが及んできたわけですね。

逆に、一般の人の関心が高まってきて、例えば「昔のトイレはどんなだったのか」という日常レベルのことを知りたいというニーズが出てきた。遺跡を見学に来た人に「ここに家を造って住んでいたのはわかったけど、トイレはどんなですか」と聞かれて、今までの考古学では答えられなかったのです。村の中にトイレがないわけではない。そういう意味でみんな考えはじめていたことなん

開催地と日程

開催地	開催館	日程
東京都	東京国立博物館	'95 6/20~7/23
新潟県	上越市立総合博物館	7/29~8/20
山形県	山形県立博物館	8/26~9/17
青森県	八戸市博物館	9/23~10/15
福岡県	福岡市博物館	10/22~11/12
沖縄県	浦添市美術館	11/30~12/24
兵庫県	姫路市立美術館	'96 1/9~1/28

ですが。丸く掘られた穴の中の土をいろいろな方法で調べてみると、未消化の瓜の種とか寄生虫の卵とか出てくる。鮭に寄生している虫が出てくれば、「生で食べていたんだな」と、どんなものをどういうふう調理していたかもわかってくる。紅花の花粉を虫くだしの薬にしていたらしいとなると、「昔の人もけっこう苦労していたんだな」とか、当時の人の健康状態もわかる。

用をたした後、昔の人はどうしていたのか、と思えば「ちゅう木」という尻を拭うための細長い板が出てくる。トイレのスタイルもいろいろで、どうやら水洗便所もあつたらしい。

そういうことを調べられるようになったのは関連諸科学と連携して研究するようになったことが大きいんです。

遺跡でわかる災害の歴史

——阪神・淡路大震災に関連して、「地層考古学」という言葉を聞きまして、

今回展示する西求女塚古墳(神戸市出土の鏡は、慶長元年(一五九六)におきた大地震を体験しているものなんです。発掘調査したときに、最初のうちは掘っても掘ってもどうもよくわからない。ちょうど埋葬施設の石室のところで四〜五メートルの段差がついている。これはなんだろうと地震の専門家にみてもらったら、大地震でできた断層だったわけですね。今では、全国各地の発掘現場で地震の痕跡が出ると専門家に参加してもらっています。液状化現象、断層地割れといった地震の痕跡はたくさん出てきます。

文献上で最も古い地震は七世紀ですが、遺跡なら何万年という古いものからわかるわけで、災害史の解明にもつながってくると思いますね。それから群馬県の遺跡は浅間山や榛名山の噴火に何度もみまわれた跡が残っていますが、火山灰をかぶつ

た田圃が驚くほど早く復旧していたりする。おこった災害に対してどう人々が対応し、復旧しているかというのを見ると、たくましいなと思えますね。

——地域展はそれぞれ特色をだして巡回する中核展とあわせて、開催地の特色を出した地域展もあるんですけど、見どころは。

地域展示は、その開催地の地域特色を生かした内容で構成してもらおう予定です。地域には地域の歴史があるし、その地域で出たものは地元の人がいちばん興味があるわけですね。また全国的にメジャーでなくても地域にとつて貴重な発見もたくさんあります。沖縄県浦添市では沖縄に関係する出土品を全国から集めて見てもらおうという企画をしていますし、福岡市では別途縄文展を企画し、後半に中核展をセッティングしています。この展覧会をきっかけに博物館を訪れる人が少しでも多くなるよう、起爆剤の役目を果たせたいと思います。(話し手/岡村道雄、松村恵司、西田健彦、坂井秀弥/編集係まとも)



慶長の大地震で崩れを西求女塚古墳(兵庫県神戸市)

粘土の中にこつた「わらじ」(東京都多摩ニュータウンNo.949遺跡)

表紙解説

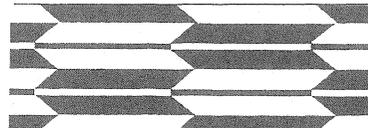
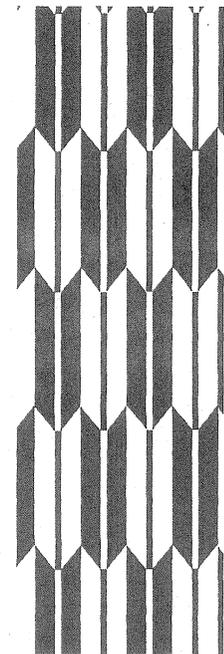
会津若松城と茶会

若松城は、豊臣秀吉の奥州仕置きにより、重臣であった蒲生氏郷が会津に入り、文禄2（1593）年に本格的城郭として築かれ、寛永16年（1639）に加藤明成により出丸の整備や天守などの増改築が行われて、現在みられる若松城の形になったといわれており、慶応4年（1867）の戊辰戦争では、一カ月に及ぶ籠城、西軍の攻撃にも耐え抜いた。

往時の本丸は、天守閣や本丸御殿などが立ち並び所であったが、明治時代初期にすべての建物が失われた。このうち天守閣が昭和40年に再建され、内部は郷土博物館として武家文化資料を中心とする170点余りの資料が展示されている。また、少庵ゆかりの茶室「麟閣」が平成2年に本丸内の旧地に再移築されたが、麟閣は干利休の自害の後、利休の茶道が途絶えるのを惜しんだ氏郷が、子の千少庵を若松城にかくまい、その時造らせたといわれている。その少庵の遺徳を偲び月命日の毎月七日に茶会が開かれている。

かつての本丸御殿などのあとは、現在市民の公園として憩いの場所となっているが、麟閣移築記念茶会や新能、会津秋まつりの際には白虎隊剣舞、天然理心流演武をはじめ大砲や火縄銃の実演が行われるなど歴史にふさわしい場所として大勢の方に利用されている。（表紙写真右／大桃たつみ撮影）

（会津若松市教育委員会主査 近藤真佐夫）



編集後記

青葉繁れる今日この頃、元気いっぱい仕事に、勉学に励んでいらっしゃると思います。

さて、今月号は考古学の特集です。事例で取り上げた遺跡は、いずれも見学したことがありますが、ちょうど発掘調査の真っ最中で、どこからどこまでが遺跡の範囲なのかもよくわからない状態でした。いずれは、吉野ヶ里遺跡や登呂遺跡等のように史跡公園として整備されるなり、展示施設等が設置されるなりして、見学者への便が図られるようになると思われます。発掘調査の成果物を展示する施設が当該遺跡の近辺にあるということは、実はかなり貴重なことで、何千年もの間土中に埋もれていた遺物や遺構を目のあたりにすると、復元された住居や標柱等を見るよりも、はるかに強力な説得力をもって我々に当時の時代や生活を語りかけてきてくれるような気がします。しかし、なかなかこうした出土品を見る機会というのは限られており、今年度からはじまる新発見考古速報展は、まさに待望の新事業だという気がします。乞う御期待。（票）

文化庁月報 5月号（通巻320号）

平成7年5月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(5371)2126

販売 03(5349)6666

振替口座 00190-0-161

印刷所—㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料78円

年間購読料6360円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

㈱きょうせい営業第一課宣伝係

電話03(5349)6657（ダイヤルイン）

©1995 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。